

新たな始まり 直屬寺院紹介 ②9

# 本願寺 四日市別院



四日市別院本堂外観

「海西真宗甲刹」の扁額を掲げ「九州御坊」として  
広く尊崇を集めた四日市別院。東西別院の壮大な伽藍  
が並び建つ門前が、特に賑わいを見せる別院報恩講は、  
古くからオトリコシと親しまれ、九州一帯から人びと  
が参拝した。

## 四日市別院のいま

2月25日、四日市別院の境内建物群が  
国の登録有形文化財となった。文化財と  
なったのは本堂、対面所、御成御殿、庫  
裏及び長御殿、経蔵、総会所、茶所、太  
鼓楼、鐘楼、山門、二之門。隣接する大  
谷派四日市別院は7年前に登録されてお

り、このたび覺を並べる両派別院が揃っ  
て文化財となった。

3月11日には第25代専如ご門主の別院  
ご巡拝があった。ご巡拝当日はとりわけ  
寒い一日となったが、早くから参拝者が  
続々と山門をくぐった。境内にある慈光  
保育園の園児たちを先頭に、ご門主をお  
迎えする人の列が、二之門から山門、本  
堂前から庫裏までの緩い坂道を埋めるさ  
まは、実に壮観だ。

13時15分にはじめられた記念式典は輪  
番挨拶、ご門主ご焼香、勤行、御消息ご  
親読と進められた。本堂の障子を取り外  
し、縁に3重、4重に椅子席を設けての  
開式となったが、700人の参拝者が本堂前  
の階段にも溢れた。

記念布教は天岸浄圓師。「人の幸せを  
わが幸せとしてくださる仏さま。そのお  
慈悲のなかで、私たちがどのようにつと  
めていくのか。このご勝縁を機に改めて  
考えていただきたい」と法話した。

当日は東日本大震災の発生から5年目  
となる日。記念行事は、東日本大震災追



満堂となった本堂

悼行事として「廢墟に希望の花が咲く」の朗読にはじまった。余韻冷めやらぬなか、各組と地域で結成したコーラスグループの合唱は2曲「み仏にいだかれて」と「花は咲く」。澄んだ歌声が本堂の高い天井に美しく響く。縁では被災者支援のための東北物産展が行われた。

続いては慈光保育園のオペレッタ「お

しゃかさま」。薄紫のおそろいの衣装をまとった子どもたちが、お釈迦様の生涯を歌と台詞で演じる。劇の進行に合わせて次々と飛び出す歌と台詞に参拝者は拍手喝采。ご門主さまと手を繋いでの終盤の演技にいたるまで上々の出来栄で、園児たちも満足のようす。

震災の発生時刻となった14時26分に追悼行事をあてるなど、配慮を重ねた日程は15時10分に閉会となった。

## 四日市別院の沿革

### ●真勝寺の成立

本願寺派と、真宗大谷派の四日市別院。西別院、東別院と親しまれる大伽藍が隣接地に並び建つ。

門前広場から極楽通りの緩い勾配を上がり、二之門、続いて山門をくぐると、西別院本堂の大屋根がそびえる。境内の南を振り仰ぐと、すぐに東別院だ。とも九州御坊と呼ばれ、「オトリコシ」には九州全域から参拝者が押し寄せた。歴

史を辿ると、競うように成立した両別院は、いま、共に当地の真宗弘通の中核として、また地域のシンボルとして親しまれている。

東別院の起りは、宇佐郡の豪族、渡辺統綱わたべつなが出家して住持した専誉庵せんよあんにはじまる。その後真勝寺の寺号を得た一字が、多くの寺院を巻き込んだ「真勝寺騒動」の結果、大谷派本山の御坊となり、今の四日市東別院となった。本願寺派の西別院の創建もこれと大きくかかわっている。

\* \* \* \*

専誉庵を建てた渡辺統綱は、地方豪族渡辺氏の出だ。大坂本願寺の第11代宗主顕如上人のもとで得度し、法名を専誉と賜った。1562（永祿5）年8月、弟子の良珍りょうちんとともに、当時廃寺となっていた宇佐郡山本村の天台宗の名刹、虚空蔵寺のなかに専誉庵と称する庵を結んだ。

その後、当地の騒乱により開基・専誉



極楽通りから二之門を仰ぐ。右は太鼓楼

は流浪を強いられることになる。弟子の良珎とともに本尊を背負い、一字再建の地を求めて各地を巡回した。南は由布院、東は国東半島、西は田川へ。末は再び宇佐郡に帰り、四日市常德によりやく一宇を再建したが、この時の苦心の巡回により、「会所」と呼ばれる拠点が各地に成立したとされる（『九州真宗史と四日市別

院』。当地の特長的な会所制度として、いまも西別院に伝えられる。

専誉往生の後、跡を継いだ正願のとき、寺号を「真勝寺」とし、故あつて本願寺派から大谷派に改派、常德から四日市中屋敷に寺基を移転した。これが現在の四日市東別院の境内だ。寺はその後いよいよ隆盛の途を辿るが、この真勝寺に、九州真宗史上最大といわれる騒動が巻き起こる。第11代宗順の時だ。

#### ◎真勝寺騒動と大岡裁き

当時、真勝寺寺中の勝福寺に、了山という長老がいた。真勝寺初代専誉を助けた良珎の子孫だ。了山側は若い住職、宗順の借銀など不行跡を責め、一方宗順側は了山を「其の性質私曲にして、逆心を発し」と誹り、いつしか双方の派閥争いに発展する。寺務の混乱は長期化し、大谷派本山が下した裁断は、内紛の因は住職の寺内取締不行届にあるとしての宗順の隠居だった。1743（寛保3）年の

ことだ。隠居を命じられた宗順は激怒。策を練って大谷派の裁断を無効にする唯一の方法に打って出た。——真勝寺の本願寺派への改派だった。

11カ寺とその門徒千三百戸がこれに従った（『大谷本願寺通紀』）。早朝から宗順派の僧侶門徒らが古巢真勝寺に押し寄せ、本門や裏の垣を倒して乱れ入り「御堂中は修羅道に相成、後には輪番の僧を理不尽に打擲いたし半死半生の体になり、門外へ押出申候」（『四日市村年代記』）と、寺を二分する抗争がはじまった。たまりかねた大谷派の西賢寺らは江戸に上り、事の理非を寺社奉行に訴え出た。

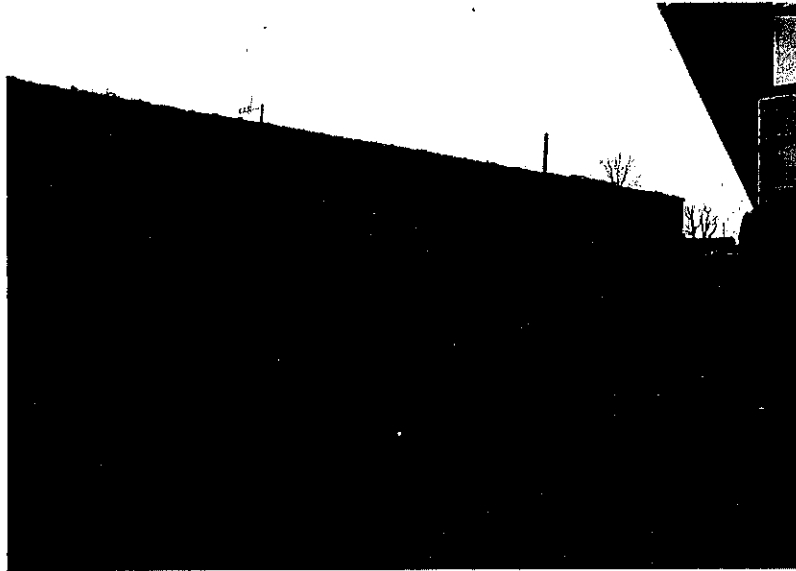
これを裁断したのが時の寺社奉行、大岡越前守忠相だ。大岡裁きで知られるおそらく最も有名な奉行だろう。急遽両派の関係者を江戸に召喚しての判決は、宗順派にとって過酷な申し渡しとなった。

宗順は八丈島流罪。真勝寺は寺跡、財産、門徒を幕府に没収。宗順派の主要人物は、流罪、入牢、または北国追放となり、大谷派の者にはお構いなしとなった。

翌、1744(寛保4)年2月。幕府は没収した真勝寺を大谷派本山に下付した。御坊御格式の儀を許可され、ここに「本願寺掛所豊前四日市御坊」(東別院)が成立した。「九州御坊」の誕生だ。

◎本願寺派門侶たちの奮闘

その後、宗順派の諸寺には本願寺派へ



別院功労者の墓。牢死した恵明と思われる墓には世間をはばかりか名前がない。

の改派が認められた。御坊誕生の大谷派の歓喜とは裏腹に、彼らの落胆は計り知れないものがあつた。これに追い打ちをかけるように遠島が決まった教覚寺恵明の牢内往生の報がもたらされ、皆で悲憤の涙を流した。

本願寺派の法中たちは知恵を絞つた。当時、幕府の法度により新寺建立が認められなかったため、川部正明寺の四日市移転(引地)をまずは願ひ出た。これが日田代官に許可される。

歓喜した法中らは、まさに東別院隣地にあたる四日市村文治郎所有の畑と藪を譲り受け、いよいよここに正明寺を移転。時期をみて本願寺派の御坊昇格とする算段はこうして半ば成就した。

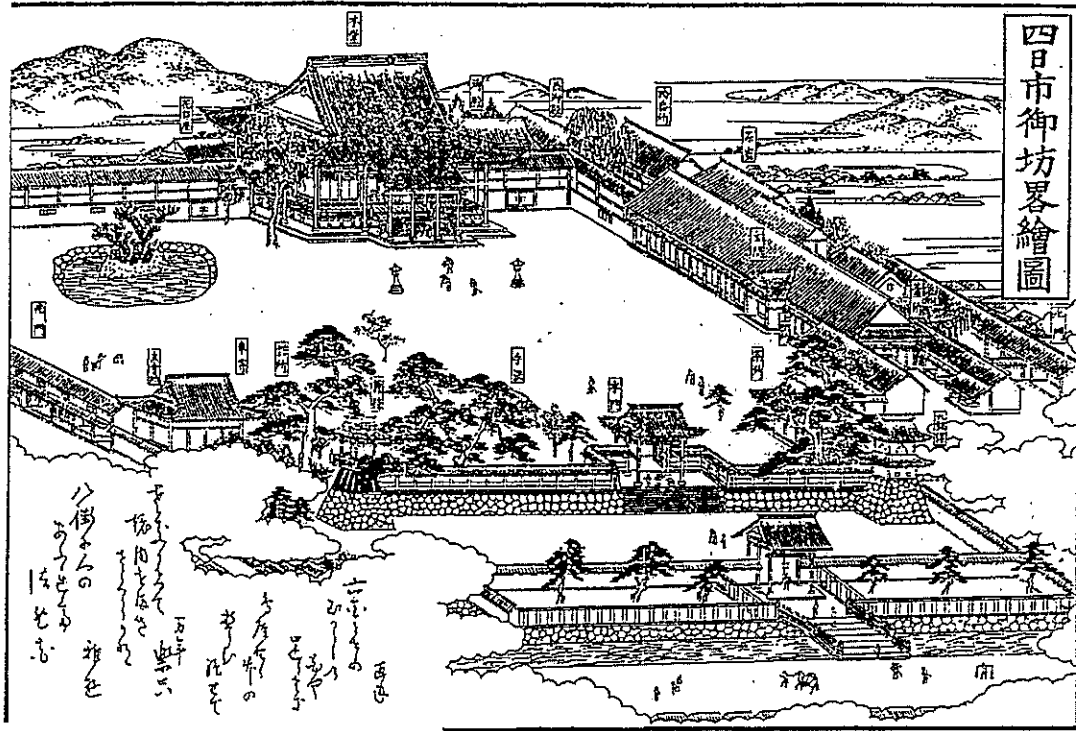
しかし、これを知るや大岡忠相は、公儀に盾つく不穩の動きとして正明寺の四日市移転を取消し、住職の香雲とその子慈忍を江戸に引き立てた。一同の希望を背負った香雲らも、一命を賭してこれに

抗した。

結局、老齡の香雲に代わり入牢した慈忍が獄死する結末となる。意気消沈した法中のなかに「数々の犠牲者の遺志を空しくすることは、宗祖に対しても申し訳が立たない」と奮起した者があつた。宇佐の浄応寺と長洲の妙満寺だ。彼らは江戸に上がって奉行所に陳情したが、また



六角の転輪蔵



別院に伝えられる「四日市御坊略絵図」は1863（文久3）年頃の作とも。

も妙満寺が客死。この事態について根負けしたのか、大岡忠相も正明寺の本願寺派本山への差しあげを許可した。

1747（延享4）年11月。遠く九州の地に西の御坊が創建されることをとりわけ喜ばれた本願寺第17代宗主法如上人は、本尊と「西本願寺四日市御兼

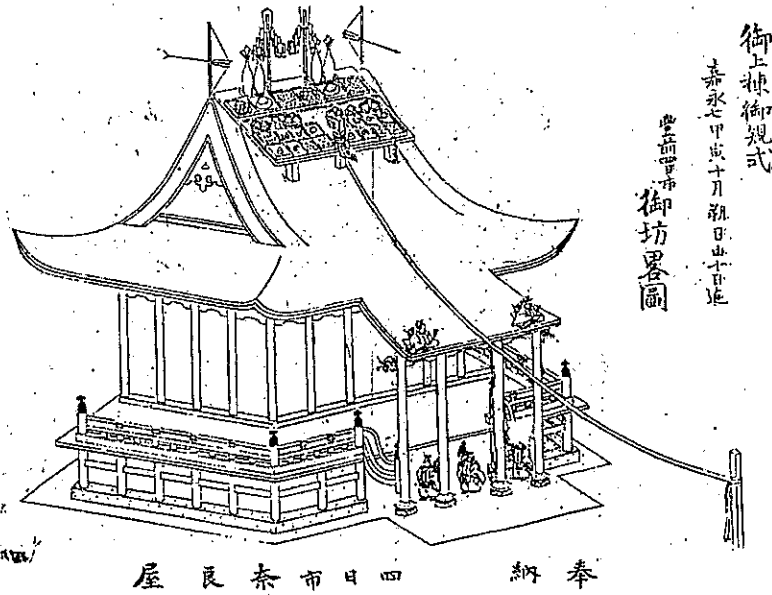
帶所護念山正明寺」の号を与えられた。こうして隣接地に東西御坊が並び立つに至ったのだ。

●九州一の御坊として

ただ当初、西御坊は名ばかりの本堂四間四面。早速ふさわしい伽藍の普請に取り掛かったが、成就したのは1766（明和3）年暮れのこと。途中普請のため木材や人夫が集まり過ぎ、年貢への影響を懸念した日田代官から「相應の普請」とするよう再三の注意を受けたりもした。20年をかけた本堂の上棟にあたり、法如上人が九州僧俗宛てに出された「別院建立の御書」には、兼帯の道場が稀である西国に、多年建立の志が有ったところの御坊成立を「実に門葉、

報恩の念力ゆえ」との喜びの言葉が綴られている。

第19代宗主本如上人のころには、御坊再建（建替）がめざされた。1836（天保7）年に日田役所に提出された「奉願口上覚」には、法要には三間ほどの掛け出しを設置しているが諸国からの参拝者が多く、けが人も出る始末だと記されている。この普請は凶作飢饉の世情もあり容易には進まず、何度も中断をはさむ困難を超え、上棟式が1854（嘉永7）年10月に行われ、祝賀能などの行事で賑わった。九州唯一の御坊として、格式高い蓮基柱れんきぢうの使用も許可された。しかし、その後も苦勞は続き、瓦を境内で製造するなど工夫を行い、1857（安政4）年10月の東御坊の火災では類焼の危機に肝を冷やしなから、ようやく落慶法要を1859（安政6）年9月1日に営んだ。十九間四面の大伽藍の完成だ。第20代宗主法如上人は、これを讃えられ「海西真宗甲刹」の額を親書して与えられた。別院の対面所にかかる扁額だ。



御上棟御規式

嘉永七年十月廿五日

豊前守 御坊畧圖

奉 餅 四 日 市 茶 良 屋

嘉永7年の御上棟御規式の図

またこの時賜った十字九字の縦2メートル30センチの御坊に合わせた大きな名号は、いま、別院本堂余間にかけてられている。

この時の寄進の記録「御堂平日用御道具覚」からは、華鬘、御戸帳、須弥壇、御厨子、高卓、打敷に至るまで、各地の門徒たちから寄進されたものであること

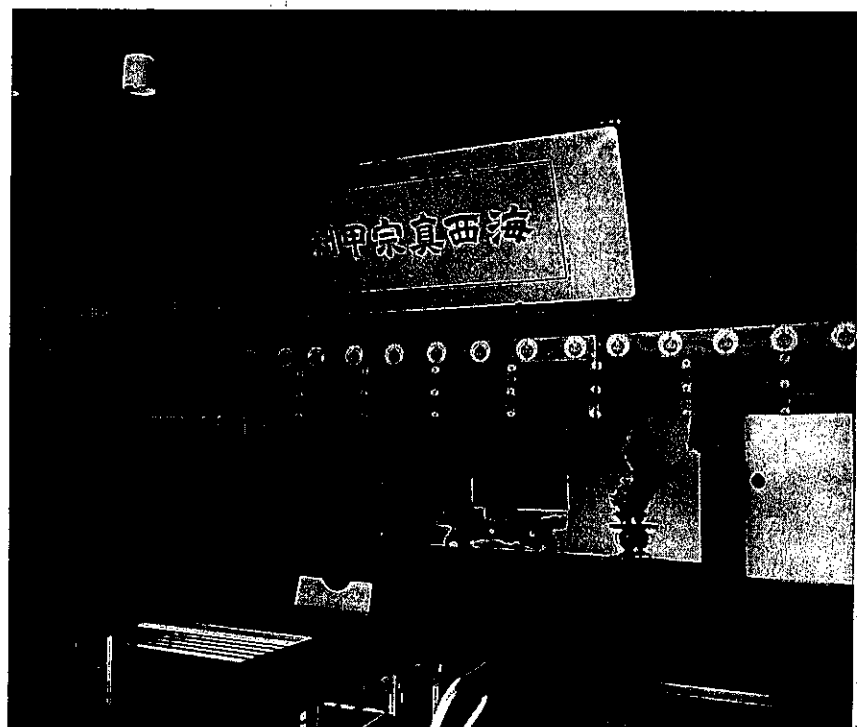
がわかる。広如上人の呼びかけに応じ、それこそ当地門侶の総力を結して、御坊は晴れて落慶の日を迎えた。

◎落慶法要と本尊紛失事件

九州全域に名を馳せる大伽藍となった西御坊では秋彼岸に合わせ、遷仏式が行われた。「九州真宗史と四日市別院」には、その折の事件が臨場感あふれる筆致で描かれている。

遷仏式の7日前。本堂の落慶法要とお祝いの餅まき

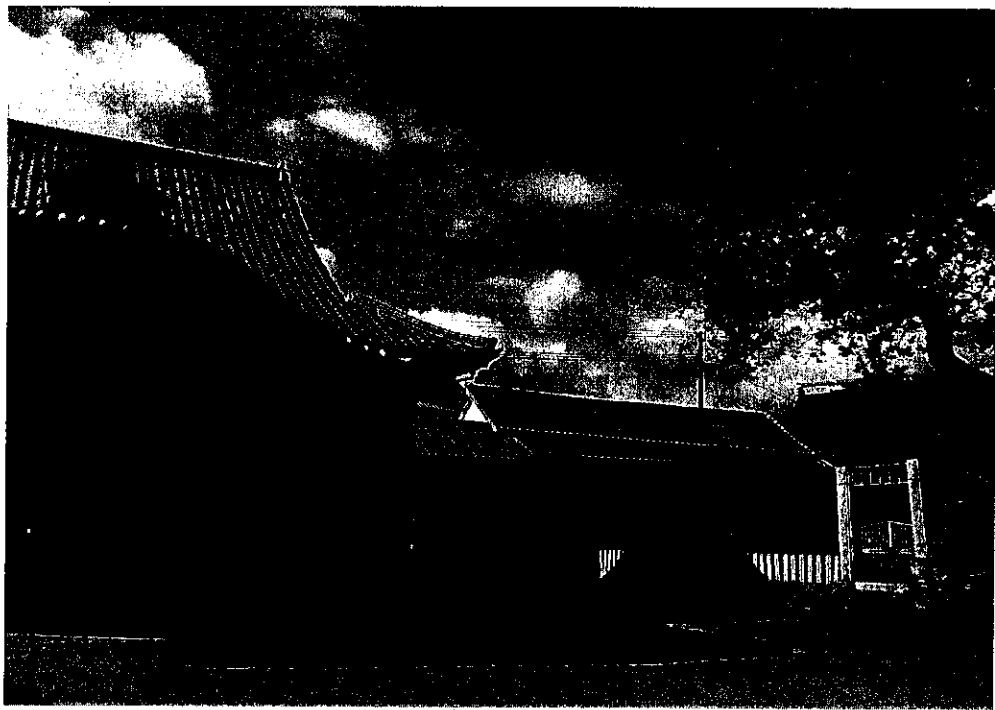
があった。爽快な秋晴れとなった早朝、豊前豊後の門徒たちが次々と御坊に餅を運ぶ。直門徒をはじめ、両郡会所（田川京都郡）、上毛、耶馬溪、中津長洲、国東、速見、由布院玖珠、宇佐郡平坦部、同山中郡など十会所から五俵ずつの決まりで持ち寄った。四日市は数万人という



対面所にかかる「海西真宗甲刺」の扁額

空前の人出となる。

落慶法要の終了後、輪番、役僧、法中世話方衆が交互に紅白の餅をまく。まく人も捨う人もお念仏のなかで、和やかに法要が勤められた。そして、その後――。静けさを取り戻した境内。日没勤行のため、輪番役僧は仮本堂に安置されたご



總會所。右奥はすぐ東別院だ。

本尊前の輪灯を点け、仰天した。

「ご本尊さまがいらつしやらない」

倒れた花瓶から流れ出た水跡が空しく光る。餅まきの混雑に乗じて、心無いものが持ち出したのだろうか。総代、世話方衆が緊急招集され、皆心配と緊張に汲々として、御坊内を隈なく探す。ご本

尊はどこにもおられない。

遷仏法要は7日後。本山からの使僧はすでに四日市入りしている。晴れやかな気分は消し飛んで、共に待ち望んだ数日後の遷仏式が一気に暗雲のなかに霞んだ。いよいよ式が明後日に迫り、聞き及んだ本山家老の島田大和守は、輪番以下を集め、涙ながらに訴えた。これまで人びとのより所となってきたご本尊の紛失は、家老、輪番が切腹しても相済まぬ事態。一同心ひとつに総力を結して残された時間、探索の継続をされたい――。

#### ◎西別院の功労者 妙宣尼

帰宅してこのことを家人に話したのは四日市村の医師、市屋渡辺三省だ。途端に表情を変えた妻が仏間に駆け込む。読経の声に続き現れた姿は、嫁入りの時の晴れ着に打掛、薄化粧の額に白の鉢巻、手には先祖伝来の薙刀（なみなた）。「只今より東御坊に参上し、ご本尊をお迎えして参ります。もし夜明けまで帰らぬようなら、亡きがらを引き取りに来てください」。言

うなり走り出した。東御坊へ。

ほとほと困ったのは東御坊の輪番だ。かねて懇意の渡辺医師の妻を前に、西御坊からの内々の連絡を受け探索した旨を告げ、東西本願寺対立の歴史にも、四日市では仲良くご法義繁昌につとめてきた旨をとくとくと語り、「その拙僧が、どうして西御坊の大切なご本尊を隠しましたようぞ」と困惑顔。妻の申すには寺で下働きをしている与五平の素振りが不審だと。東御坊の輪番がしぶしぶ事情を聞くと、与五平は震え出し――。

結局、ご本尊は東御坊の本堂裏から見つかった。羽織にくるまれ堀越しに裏庭に投げ込まれたご本尊を、偶然見つけた与五平。嫌疑がかかるのを恐れ、こっそり雨露しのげる場所にお移ししたのだという。しかし夜ごとご本尊が夢に現れ、「西に帰りたい」と仰せられる。日頃世話になっている市屋の妻女に事情を話し、西御坊に帰してもらおうと思ったが言えなかったのだと与五平は泣き崩れた。

帰還されたご本尊を奉じ、遷仏式が盛大に営まれたのは言うまでもない。その後、渡辺医師の妻は、帰京した島田大和守からの報告を受けた広如上人の招きにより京都の本山に参拝した。妙宣との法名を賜わり、往生の後は特別功労者として、御坊に葬られたという。

◎広大な境内を学び舎として

西別院の広大な境内には学校が置かれたこともあった。海西女学校だ。1921（大正10）年、西別院婦人会の発起で裁縫学校として創立。本堂を教室として30名足らずからはじまった学校だが、昭和初期の最盛期には500人の生徒が学んだ。遠方の生徒は当初、別院2階などに寝起きしたというが、生徒が増える校長が自費で町内山下に寄宿舎を購入するなど、熱意ある女子教育で知られた。女学校は第二次世界大戦中に閉鎖され、1987（昭和62）年当時はその建物を保育園と洋裁学校に使っていた記録が残る。いま、この境内東南には慈光保育園



昭和初期の海西女学校

があり、園児たちが境内を駆けまわる姿が実にほほえましい。

◎四日市別院のオトリコシ

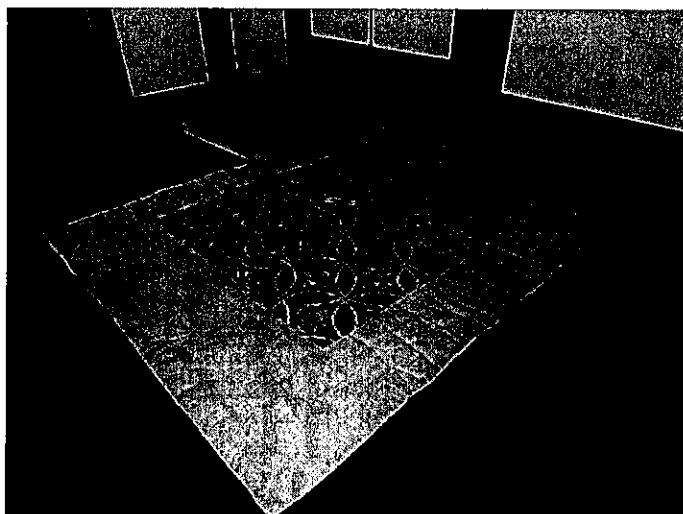
1979（昭和54）年刊行の『宇佐市史』には、当地に「特殊な行事」として「東西本願寺別院のオトリコシ」が上げ

られている。毎年12月11日から16日にかけて勤められる別院のお取り越し報恩講のことだ。

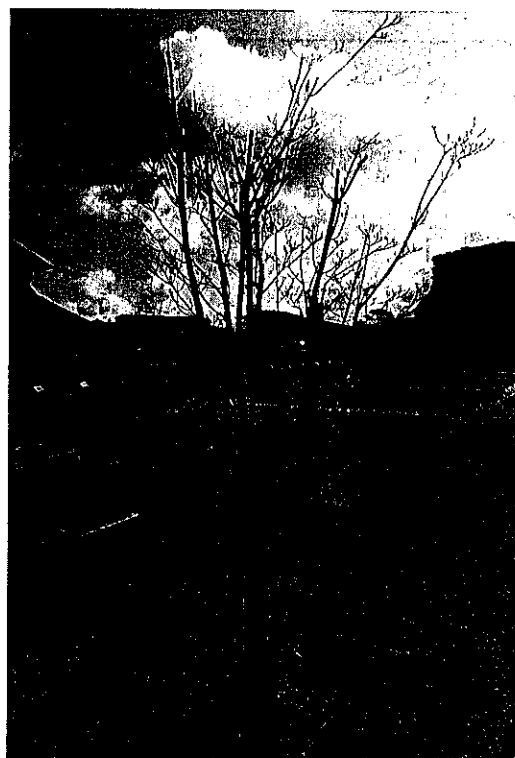
九州全域から門侶が参拝し、道すがら念仏の声絶えなかったという。別院では読経と法話があり、当時、境内周辺、町中に出店が並んだ。石炭箱のうえに戸板を置き、白布を敷いた台の上に日用品、仏壇仏具、衣料、食料、履物など、雑多な品が並ぶ。麻生谷で採取される「ケンポナシ」がこの場だけの売り物で、詣でる人はこれを口にしないと「オトリコシ」気分を味わえないとまで書いてある。別院境内と門前広場に木があるが、とても食べ物とは思えない形をしていて、梨の香りがしてほんのり甘いという。土産には四日市人形や、道すがら人びとがなめた大振りの飴「大十里越」があった。いまでも味わえる「やぶれ饅頭」は懐かしく優しい味だ。驚くことに当時はサーカスが必ず催されたという。

遠方の参拝者の宿泊所となった会所には、数メートルもある長い布団が用意さ





会所にてオトリコシで使われた巨大な布団



門前広場に植えられたケンボナシの木

れた。いまは別院で保管されている。どつしりと重い綿に歴史を感じる。寒さ厳しい季節ながら、何十人もが足を入れて暖を取り、会所では食事も用意された。町内は知人親戚を泊めるのに大忙し、子どもたちにとっては正月以上に楽しい期間であったというのも頷ける。

◎本堂の修復と新たな展開

西別院本堂は1997（平成9）年に修復のための委員会を立ち上げ、2000（平成12）年に修復を終えた。2003（平成15）年5月26日から28日にかけて、蓮如上人500回遠忌法要と併せ本堂修復慶讃法要を即如門主（当時）ご親修にて営んだ。参拝者があふれ、東別院の境内も借り受けての修行となった。前年の東別院の法要の際には西別院が境内を開放し、画期的と評された東西協力で、新たな時代が開かれた。

この時編集された『豊前四日市東西別

院の歴史』で別院成立のより詳細な成り立ちが明らかにされている。

先人たちの苦勞の末に、有縁の人の総力を結して建立された西別院。一帯は門前町として近年整備され、昨年の10月31日、11月1日には「第13回全国門前町サミット」が開催された。このほど境内建物が国の登録有形文化財となり、「九州御坊」と呼ばれた壮大な伽藍を誇る歴史ある境内に、今日もみ教えを喜ぶ人びとが集う。

### 本願寺四日市別院

大分県宇佐市四日市1410  
TEL 0978-32-1901

◎JR柳ヶ浦駅から車で20分

●報恩講御引上会（おとりこし）  
12月11日午後～16日午前